東川インディペンデンス展より

北海道上川郡の「写真の町」東川町で8月に行われた「東川町国際写真フェスティバル」は今年31回を迎えた。高等学校写真部にとって「写真甲子園」は最大のイベント、国際的な写真賞である「写真の町東川賞」とともに、公募展「写真インディペンデンス展」は写真愛好家や写真を志す若者たちの積極的な参加を得て今年も開催された。印象に残った3名の作品を紹介する。

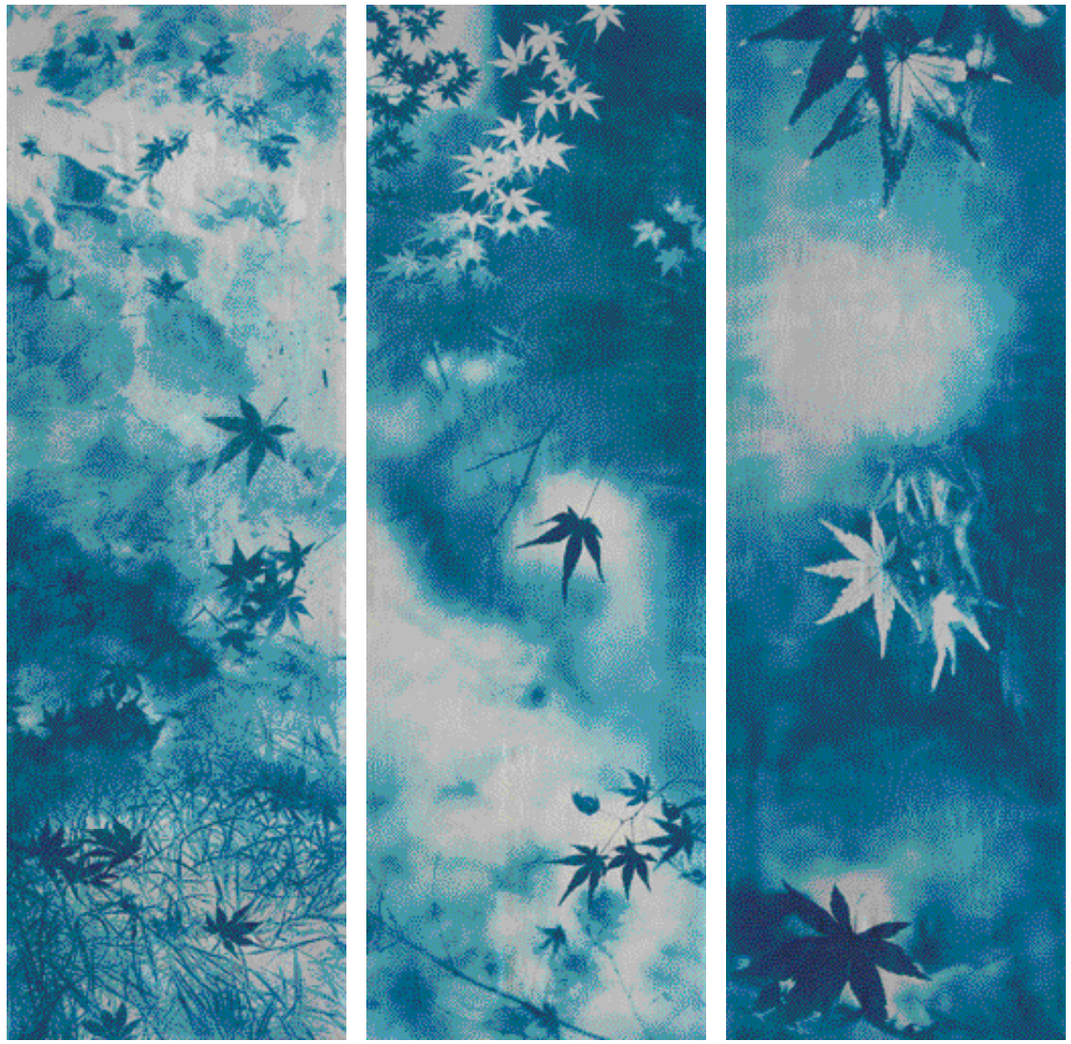
◉山本顕史［Akihito Yamamoto］

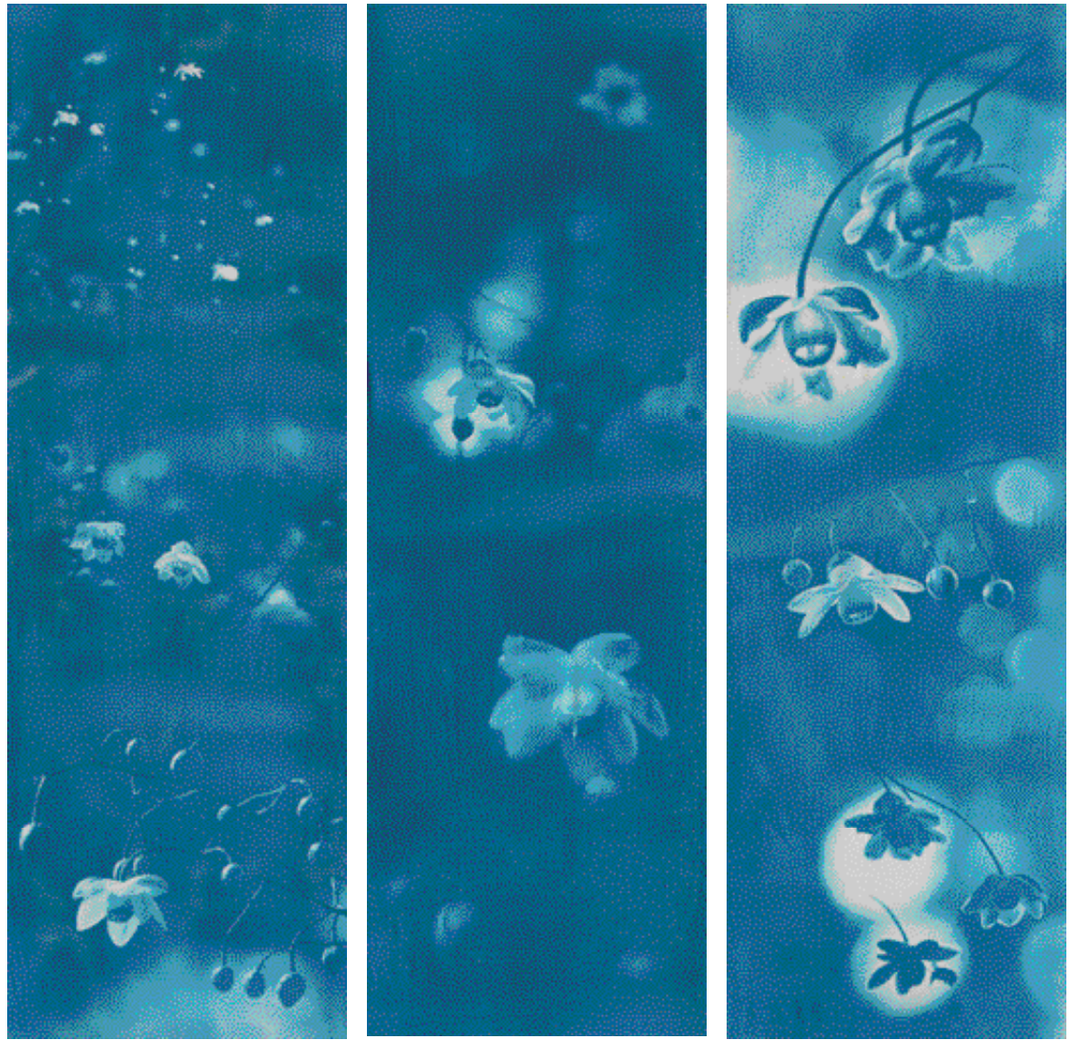
「ここでは菊を手向ける」

DATA ○○

葬儀に用いる祭壇、それに関わる人を通して現在の死生観の姿、形を探る「ここでは菊を手向ける」というタイトルの作品シリーズの中から2枚選 びました。日本、フランスでの葬儀で特によく使われる菊を中心に円、鏡など神聖さ含んだシンボルを用いて再構成しています。2016年3月に は札幌のギャラリーCAI02（札幌市中央区大通西5丁目8 昭和ビル地下2階）にて同作品タイトルでの写真展をする予定です。

札幌生まれ。2011年「ユキオト」で第1回東川町リコーポートフォリオオーディション最優秀賞受賞。





◉佐藤素子 [Motoko Sato]

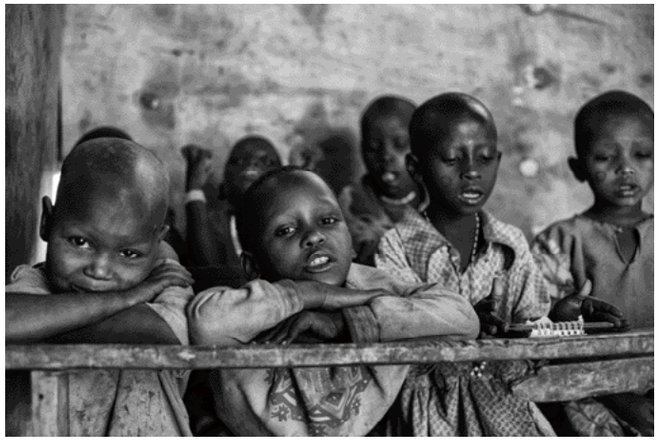
「Flora Japonica」

DATA オリンパスOM−D E-M1、M.ZUIKO DIGITAL ED 75ミリ、ED 40〜150ミリ F2.8 PRO、コシナフォクトレンダーNOKTON 25ミリ F0.95

かつて、私は藍を育て染めていた。自然は全ての色を隠し持っており、私は植物から色を分けていただいた。時間をかけて、深く濃い色を得る。
いま、私はサイアノタイプに出会った。自然は全ての形を隠し持っており、私は植物から形をわけていただく。時間をかけて、もう一度自然とつながり直すために。

武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。公立学校図画工作教諭。2013年よりSAMURAI FOTO会員。主なプロジェクト「Les cadeaux」「Silent memories」「Futa-Ai」グループ展多数出展2016年1月21日〜24日、第8回ゴミゼロ倶楽部写真展（新宿エコギャラリー）にて、Flora Japonica新作を展示予定

東川
インディ
ペンデンス展
より



◉若松誠 [Makoto Wakamatsu]

「陽のあたる場所」

DATA ソニーα7、ニコンDf、SUMMICRON R 50ミリ F2.0、NIKKOR 50ミリ F1.8、Summarit 35ミリ F2.0

人生は一度、さあ、陽のあたる場所を探そう。スティービーワンダーの名曲、中学生の頃からこの曲を聴くと元気になる。ベドウィンの様に、自らの意思で定住を選ばない選択をする場合もあるが、マサイは法律で居住できる場所が制限されている。諦めを余儀なくされる生活がある一方で、強い意志を持って信じ続ければ、希望はきっとかなう。いつか本当の自分の居場所を探す旅に出るために、英語を学ぶ子供達の眼には希望が宿っていた。

1969年生まれ、東京都在住。　フォトグラファー・ネームはImpatientMEI。愛犬のMEIとRUEとの生活の記録のために2012年から写真を撮り始める。　これまで、国内外のストリートスナップを中心に撮影を行ってきたが、組み写真に興味を持ち、ステイトメントをベースとした作品制作を開始。

東川インディペンデンス展より

「東川インディペンデンス展」は幅1.8㍍×高さ2.4㍍の壁を自由にレイアウトし、東川フォトフェスタのメイン期間を合わせ約1カ月間展示される。今年は8月9日に合評会がおこわれた。大学教授、作家、写真家、写真評論家らが、真摯な批評をおこなった。直接複数の表現者からの助言に参加者たちには励みになったことだろう。来年の参加希望者は東川町（写真の町課）に問い合わせを。

東川インディペンデンス展によせて

東川賞審査会審査委員
写真評論家
上野 修

「東川自由フォーラム：写真インディペンデンス展～出会いと合評の集い～」は、東川町国際写真フェスティバルのなかでも、初期から続いている恒例イベントのひとつである。「インディペンデンス展」とは、仏語でいう「アンデパンダン展」、つまり無審査展のことであり、誰でも参加、展示できることが特徴だ。

無審査で誰でも、といっても、けっして作品のレベルが低いわけではない。受賞作家展と同じ「文化ギャラリー」の一角で、1.8㍍×2.4㍍の壁面を自由に使って展示、「出会いと合評の集い」に参加するという企画ならではの、緊張感と高揚感に満ちた場になっており、毎年、とても高いレベルの作品が展示されている。

今年も、文字どおり、老若男女、北は北海道から南は沖縄、初心者からベテランまで、さまざまな方が参加し、見応えのある作品が展開されていた。「出会いと合評の集い」では、東川賞審査会委員、教育者、写真家、評論家と出品者が、熱く言葉を交わし、ライブな空間が生まれた。この臨場感こそは、東川ならではのもので、私も毎年、新鮮な刺激を感じている。

自分の作品を壁面に展示し、参加者、レビューアーとともに見て、多様な言葉を味わうことは、きっと、かけがえのない経験になると思う。来年もまた、意欲的な作品に出会えることを楽しみにしています。

写真評論家
桐谷麗了子

山本顕史さんの作品は、展示会場内でぱっと目をひいた。限られたスペースには、できるだけ多くの枚数を詰め込みたくなりがちだが、山本さんが展示したのは大きく引き伸ばしたプリント2点のみ。潔い展示方法が鮮やかな花の写真を引き立たせ、コンセプトや背景にあるストーリーへの興味をかきたてた。

佐藤素子さんは、サイアノタイプの青色と、絹という素材を結びつけたのがよかった。会場では、反物のような短冊型の写真が3点ずつ2段に並べられており、店の暖簾や着物など、日本文化にまつわるものを自然と思い起こさせるように工夫されていた。作品づくりへの思い切った姿勢が印象深い。

若松誠さんの作品は、重厚なモノクロプリントが魅力だ。一点一点に詩的な空気がただよい、想像力が刺激される。人物の表情をとらえる感性や、画面構成の力がずば抜けていた実力派だけに、もっとたくさんの写真を見てみたいと思った。

合評の場でのプレゼンテーションは、自分の写真について改めて整理し、考える絶好の機会である。初めての展示の場や、さらなるジャンプアップを目指す場所としても、多くの人に活用してほしい。

次回2016年
東川インディペンデンス展
予定

期間：2016年7月30日～9月●日
（合評会は7月31日を予定）
会場：東川町文化ギャラリーを予定

※参加・展示を希望の方は下記電話番号またはURLからお問い合わせください。
0166-82-2111
https://town.higashikawa.hokkaido.jp/